



# 炉端の会 今月のコラム

「いろいろばた、つて、どこ」

賢そうな女の子が、真剣な表情で聞いてくる。

囲炉裏に火が入り、ようやく薪が燃え始めたときのことだ。小学三年生だという彼女は「囲炉裏」という言葉を知るまい。きっと、学校で「（民家園に行つたら）いろいろの側に行つてごらん」と言われて来たに違いない。

「ほら、いま、火が燃えているでしよう。この周りが囲炉裏端なんだよ」。「フーン」という表情の彼女。ひと通り囲炉裏について講釈しながらも、この一刻がなぜかうれしかった。

「この春から囲炉裏を焚くボランティア活動を始めたんだ」と言うと、友人たちの一瞬、不思議そうな顔をしつつも、ふたこと目には「いいねえ」。都会育ちで囲炉裏なんか知るはずもない者も含めて、一様にそんな反応を示す。

筆者の世代には囲炉裏端は郷愁を誘うが、いまは失われた生活空間だという思いがある。あの子どもたちがどこまで「囲炉裏端」を分かつてくれたかな、と思案しつつ、山を下りた。